第一部　博物館・資料館と地域

小菅（こすげ）の歴史と文化
――博物館の必要性との関連で――

はじめに

飯山市教育委員会の望月静雄さんから、「こういう催し物があるから話をして欲しい」と突然求められましたので、私は何を話したら良いのかも知らないでやって来ました。

加えて、多忙なものですから、本日の講演内容をきちんと考えてくる暇がありませんでした。今日の皆様の集まりがどういう会であるのかも、実際のところは認識しておりません。ですから二、三行き違いがあるかもしれませんが、その点ご容赦ください。

本日の講演にあたり、まず「いいやま博物館友の会」が主催者であることにつきまして、感謝いたします。その上で、皆さんに最初に考えていただきたいのは、皆さんの会の名前にも入っている「博物館」とは何かです。このことを一緒に確認していただいた上で、本日のテーマである小菅の問題へ入っていきたいと思います。

一、博物館とは何か

私たちのめざす博物館

私も皆様と同様に現在、山梨県立博物館をつくるため、いろいろ活動しております。ただ今私が手に持っておりますのは、昨年私たちが作った『私たちのめざす博物館』という山梨県立博物館の基本構想報告書です。

表紙を見ていただければわかりますように、ちょっと変わった報告書です。こういう風変わりな報告書はこれまでないと思うのですが、いかがでしょうか。表題は『私たちのめざす博物館』で、報告書という言葉は付録で小さく書いてあるだけです。表紙の写真も私たちが選定いたしました。記載されている内容も、難しいことを並べるのではなくて、できるだけ一般の人が見てわかるように、読んだ人が面白いと思うようにしたつもりです。しかも、中には興味を持ってもらえるだろうと考えたコラムがいっぱい入っています。

『私たちのめざす博物館』

私は、博物館をつくっていく原動力は県民の希望であり運動なのだから、報告書といっても難しい内容では何の意味もない、と考えました。報告書であっても多くの人に読まれなければ建設資金を出す県民の理解が得られませんから、興味

を引くものにしようということです。県民のための博物館だということを前提にして、ともかく手作りでやってみようと提案した結果、この報告書ができたのです。一方で、いろいろやっているうちに会議費がかさみ、印刷費がなくなってしまったので、県職員の方が文章などを全部パソコンに打ち込み、イラストなども入れ込んで、それをプリントアウトして印刷だけ業者に回したという実態もありました。本当に手作りの報告書です。このため、刊行部数も少なく、山梨県内でもこの報告書はコピーで出まわっている状態です。

私は、報告書であっても十分商品になると判断されるようなものでなければいけないと考えています。報告書が多くの読者を得て読み継がれ、それによって文化が育成されていくはずだという理念のもとで、この報告書は完成したのです。

これを作った目的の一つは、博物館が何であるか山梨県民に知っていただかなければ、県立博物館建設が前に進めない、したがって博物館の必要性を訴えようというところにあります。ちょっと頭の固い人は、博物館が古くさいものを陳列している場所と理解しているようです。極端な言い方をすると、国宝級の美術品やその他珍しい物を陳列して人を集める場所、そうでなければもう使えなくなった道具などのお墓が博物館だ、こういうイメージが大きいようです。実際、今まで「博物館行き」というと、何となくもう寿命の終わった物を指し示すように考え、博物館とは古くさい物の展示場だと理解していたようです。しかしながら、本当の博物館はそういう場所ではない、みんなで博物館とは

何かを考え、理解して欲しい。ここから私たちは出発しています。

そこで、私は博物館をどのような場と理解しているかを、最初に述べたいと思います。

学びの場としての博物館

基本的に博物館は学ぶ場所であり、学ぶ主体者は入館者個々人です。学びたいという意識がなくて博物館に行っても、何の意味もありません。じゃあ、学ぶ場所としては博物館以外にどのようなものがあるでしょうか。

皆さんの思いつくのは、小学校、中学校、高等学校などの学校ですが、これは名前からしても間違いなく学びの場です。学校での主人公は、先生でなくて子どもたちです。博物館も本来まったく同じ役割を負い、学芸員が先生で、見学者は学生に当たります。

これから飯山市が博物館を持てるか持てないかは、お集まりの皆さんが博物館を必要とするか、必要としないか、認識することによって決まります。皆さんが学ぶに際して足が地についているか、地についていないか、これがすべての基本になるのです。

学びの場は無料に

山梨県の場合、博物館を建設することに対しては、経済状況が悪い今時、箱物行政をすべきではな

いと、大きな批判が出ています。このような批判は飯山市の場合でも当然わき上がるでしょう。でも皆さん、飯山市が小学校、中学校に教育資金をつぎ込んだり、よその市町村よりもお金をかけて立派な校舎を建て、設備を充実することに正面切って反対の方はどれくらいいるでしょうか？　教育施設なのだから、我々の生活費を少しくらい削ってでもいいから、小学校、中学校をいいものにしようという意見に賛成していただける方はどれくらいおいでになりますか？　いたら手をあげてみてください。これだけですか？　よそと比較して少ない感じがしますね。

私の経験ですと、基本的にどこの市町村に行っても、行政が学校にお金をかけて文句をいわれることはまずないようです。それは小学校、中学校で学んだ子どもたちこそが次の社会の担い手であって、彼らの知識、優秀な子どもたち自身が私たちの重要な財産であり、彼らが私たちの夢の担い手だからです。学校や教育に公的資金を投入することは、学校で学んだ子どもたちがきっと私たちの世界を良くしてくれるだろうという、未来への期待もあって、どこの市町村でも自信を持って行っているはずです。

飯山市立図書館に入館するのは有料でしょうか？　それとも無料でしょうか？　もちろん無料ですよね。日本の公立図書館で有料というのはどのくらいあるでしょうか。おそらくほとんどないはずです。それなら、なぜ無料なんでしょうか。図書館建設のための費用、次々と本を買い込む資金、職員の経費、光熱費などを合計すると、利用する人たち一人一人に対してのサービス料は大変な金額に

なっているはずです。けれども、基本的に図書館利用は無料です。学ぶということを保証するために、無料にしているんじゃないでしょうか。市民の皆さんがそれぞれ勉強することは、市にとってプラスになると考えているから、市は教育のために経費を使っているのだと思います。

博物館に関係してはどうしてもそういう意識がないようです。私どもの大学もそうですけれども、現在国立の博物館や大学などでは独立行政法人化が進められてきています。各地域で博物館も独立採算ができるようにすべきだという動きが出てきています。ところが、博物館は利益を上げるような施設ではありません。またもうけの対象になるべきでないと思います。各市町村において小学校、中学校で直接的な利益を上げようとしているところはないはずです。図書館もそこから収入を得ようとしている公共団体はないはずです。これは教育のために当たり前のことなんです。そもそももうけがないからこそ、公立機関になっているのです。博物館法では博物館は無料だとされています。

博物館は学ぶ場所で、その主人公はあくまでも見学に行く皆さんであって、単に陳列されている物を何の気なしに見てくる場所ではないということを確認しましょう。そうでないと、皆さんが「博物館友の会」をつくっても意味はないし、将来博物館を建設しても魂をこめることができません。

私たちが学ぶための博物館はいったいどういうふうにあったらいいのか、これが次の段階で考えなければいけないことです。言葉を換えますと、飯山にとって飯山でしか学べないもの、飯山がよそに対して誇れるもの、これがいったいどれだけあるのでしょうか。そういう事柄と、自分とはどのよう

に結びついているのでしょうか。

自己発見の場所が博物館

先ほどちょっと言い忘れましたので、もう一つ博物館の論理を付け加えておきましょう。飯山市内の小学校、中学校はよその住民、すなわち飯山以外からくる人たち、の見学施設としてつくられておりません。主人公はあくまでも飯山市内に住んでいる子どもたちです。飯山市立図書館も、長野市の人のために建設されたものではありません。基本的には飯山住民のための施設です。

博物館になると多くの場合、よそからどれだけ人が入ってくるかという、あたかも観光施設のような、わけのわからない論点が重視されます。しかしながら、基本的に市民のための施設だということを前提にしなければ、博物館は成り立ちません。したがいまして、飯山にはこんないいところがあるよ、とよその住民に対する紹介や自慢のためでなくて、私たち一人一人がなぜここで生まれ、ここで人生の格闘をしているのかを確認できる学びの場にする必要があります。

それなら、私たちは飯山で何が学べるでしょうか、何を学ぶべきなのでしょうか、これが次の問題になるんじゃないかと思います。

二、飯山の特色

雪の世界

皆さんが学ぶべき故郷の飯山はどのような特色を持つのでしょうか。私がちょっと考えるに、飯山の代表的イメージの一つは、今日、この建物の外側に広がる雪の風景です。現在も周囲に雪が残っていますが、雪の問題をまずあげねばなりません。本当のところ、今年は後で話をする小菅との関係もありまして、私も一度大雪の頃に小菅を見に来たいと思っておりました。けれども、今年は雪が少ないと聞いたことと、私が正月一日から始まってほとんど毎日原稿の執筆と校正、さらに会議、講演等に追われていて、残念ながら来ることができませんでした。

雪の飯山

この雪の世界はよそではちょっと見ることができない特別なものですね。私は先週の金曜日から日曜日まで、静岡県の伊東市におりました。暖かい伊東では一部の桜がもう咲いていました。南の方は大変暖かい花の世界でした。それが長野県内でも北の方に向かうにしたがって、特に長野市を過ぎるにつれて、だんだん雪景色になって、ついには一面の雪の世界になってきました。

昨日、私は柳原地区の方たちと話をしたのですが、その経験をふま

えても、どちらかというと、これまで飯山の人たちは雪をマイナスのイメージでしかとらえていなかったようです。どんなものでも、プラスとマイナスの二つの側面がありながら、飯山では雪についてマイナスイメージだけが肥大化してきました。

県内で私が好きな地域は下伊那と飯山です。それはなぜかというと、住民の人柄がいいからです。物資の豊かさの問題ではなくて、人間が開けっぴろげで、心の温かいところが好きです。私は昨夜望月さんのお宅に泊めていただいたのですが、まわりの人が望月さんの家の中にぱっと入ってきて、どんどん居間に座り出しました。この雰囲気、つまり人と人との接触の度合いが、よそと比較すると非常に濃く、独特のつながりが生まれている、それが私が飯山に来ざるを得ない原因になっているのではないかと思います。

飯山の場合、住民はおそらく野垂れ死にはしないんじゃないかなあって感ずるくらい、人と人との付き合いが濃いのです。それが好きな人もいれば、嫌いな人もあるだろうけれども、少なくとも長野県内で私は下伊那と並んで飯山を、とても住民の人柄がいい、人の結びつきの強いところだと、高く評価しております。

人が結びつかざるを得ない原因の一つは、この大雪でしょう。この雪をかくのには、私の家の前だけっていうわけにいかないですよね。全体を除雪していかなければいけません、互いに協力しあわなければ作業が完結しない。ひょっとすると、この深い雪が皆さんの互いに協力し合う、独特な雰囲気

をつくりあげているのではないかと考えます。

そのことは近ごろ、飯山の皆さん方も自覚されているようです。たとえば飯山の雪まつり、今年は来ることができませんでしたが、あの雪まつりで魅力的なのは、札幌の雪祭りと違うところですよね。札幌ではよそからやって来る観光客相手ですが、ここでは観光客相手じゃなくて、参加する人たちが楽しんで雪像を作り、自分たちこそが主人公だって気になっているところです。

マイナスはひょっとすると、まったく違うプラスに変えることができます。雪の飯山の世界を見て、なぜ私たちはこういう温かく、辛抱強い性格の人がこんなにいるんだろう、こういうことを考えていかなくてはなりません。おそらく雪は重要な飯山研究の素材になります。しかも、これは日本の中での飯山の位置や文化を考える、キータームにもなるはずです。

飯山城

飯山を考える素材として飯山城もあります。飯山城に関しては、先に大きなシンポジウムが行われたようで、ずいぶん立派な資料をいただきました。もし飯山城がなかったならば、近世の飯山の中心核が存在しなかったことになります。その意味では、望月さんも主張されている通り、飯山城という飯山のシンボルになる歴史の場を、これからどういう形で整備し、未来にバトンタッチしていくか、市民の皆さんが真剣に考えていかなければなりません。

飯山城

ですから、博物館の場合も、飯山の展示では県宝や重要文化財の立派な文化財が飾られていましたよという評価ではなくて、飯山城の展示を見て飯山の中心とは何かを考える機会を提供されましたよ、などと評価されるのが望ましいのです。飯山城など市の歴史の証言者となるものを、将来どのようにして子どもたちに伝えていけるか、そこで何を教えるべきなのか、そういうことを考える場として博物館が必要であり、飯山城も展示の主題の一つになるのです。

その次に私が考えたのは、小菅のことですが、これに関しては後ほど改めて話していきたいと思います。

他にもいろいろ飯山市にはすばらしいものがありますよね。五束（ごそく）の太々神楽もあれば、過日県の記録文化財として指定された笹寿司などもあります。

私たちの日常生活をきちんと振り返って考えれば、私たちのまわりには、なぜ私たちがこの時点に立って、こういう状況でいるのか、という研究材料がいっぱいあります。それを学ぶのが博物館の大事な使命です。

逆にいいますと、県の文化財であろうが、国の文化財であろうが、市の文化財であろうが、それを通じて学ぶ人がいなければ何の価値もありません。学ぶために私たちは文化財を指定するのです。

学習のセンター

先ほど望月さんから、飯山市で発掘された珠洲焼の話が出ました。この点につきましては、また後で触れたいと思いますが、あんな黒い陶片の一片、今まで誰も見向きもしなかった焼物の一片から、北陸地方とこの地域の流通上のつながりが想定され、そこに飯山地方の文化の熟成度を確認できます。これは破片を見いだし、それを考えてはじめて明らかになることです。私たちはこのように考えるために学ぶ場――つまり博物館、学べる人――つまり学芸員、学べる素材――つまり展示品や収蔵品を持ちたいと思います。地域の過去や未来を学べる素材を提供してくれる、学びの場所こそが博物館なのです。

私の考えている博物館では、極端ないい方ですけれども、展示室なんかどうでもいいんですよ。展示室よりも皆さんがいつでも入っていくことができて、「これがわからないけど、誰かちょっと考えてくれないか」と尋ねると、いつでも受け入れてくれる人や、わからない人やわかる人が集まれる部屋があって、みんなで「ここがわからない」「それはこういうことなんだ」と、ワイワイガヤガヤとお茶を飲みながらでも集まれる、そういう場であって欲しいと思います。

これまで述べてきたことに対応するものを作るのなら、壮大な博物館は必要じゃないだろうと思います。むしろ素材になるものを用意できる収蔵庫を立派なものにすべきです。

それから、地域の中にとけ込んでくれる人柄のよい学芸員がいて欲しいものです。難しい学者はいらないんですよ。自分だけの学問をやっていて、日本に対してどういう地位を得たいという人よりは、むしろ地域の礎（いしずえ）になってくれる、人間的な魅力を持った、温かい人がいてくれるほうがいいと思います。

もしそういうことをめざすんだとしたら、ハブ博物館構想しかないでしょう。それは自転車の車輪のように、真ん中の部分に中心核となる博物館を設け、質問に対してこれを知りたいんだったらこっちへ行ってください、その問題についてはあっちへ行ってくださいと、あたかも車軸から周囲にのびる自転車のスポークのように、中心から外に向かって方向を指し示してやる博物館です。

たとえば、飯山で古いことを学びたいんだったら、あそこへ行ってみましたか。あなたが中世について学びたいんだったら、小菅ではこういうことが学べますよ。だから小菅へ行ってみたらどうでしょう、と案内をするわけです。現地をふまないで博物館だけで学べるような施設をつくるのではなくて、現地へ行って確認をし、本当の勉強をしましょう、という指導をやっていかなければなりません。博物館だけが栄えるのではなくて、地域に足を運ぶ人が増え、地域が学ばれなくてはいけないのです。そういう博物館を何とかつくっていけたらいいなあと思います。

このためには、皆さんが本当に博物館が必要なんだという自覚を持って、市を動かしていくしか建設の手段はありません。その時には、よその市町村でよく繰り返しいわれる何人が入るという入館者人数だけへの着目でなくて、これはあくまで教育機関だとの認識が不可欠です。展示品の用意や人件

費、ランニングコストなどからしたら、博物館の入館料で利益をあげることはまず不可能です。博物館は決して金銭的利益を生みません。これによって市の収入が増えるわけではないのですが、文化を育てるためには博物館が必要です、という論理をきちんと組み立てて主張していくしかないでしょう。

飯山の中で学ぶべき対象として、私は間違いなく小菅があるだろうと思いますので、そのことを、次に触れていきたいと思います。

三、小菅の歴史と文化

歴史の原風景

先にちょっと余計なことをいいます。昨年、私のところに『別冊歴史読本　日本歴史の原風景』の企画趣意書が送られてきましたので、その一部分を読ませていただきます。

高度成長期以来、日本列島の風景は激しい勢いで変貌しています。その一方で現代の風景の下に潜んでいる歴史の痕跡は今もなお様々な日本史の原風景を伝えています。昨日まで跡をとどめていた歴史的な風景が次々に消滅している現在、歴史を読み考えるためにその舞台を再現し追体験することは、いよいよ重要になってきているといえます。本企画は痕跡をとどめる主な歴史風景において航空写真と現況写真をもとに、一部発掘写真や絵画等を掲載して原風景を探り歴史を読み解こうとするもので

す。どのような歴史が個々の景観から読み解けるか明らかにするとともに、実際に歩いてみたい人にも配慮するような内容にしたいと思います。

『日本歴史の原風景』

ということで、監修が石井進先生、前の国立歴史民俗学博物館の館長、長らく東大の先生をしていた方ですね。それから編集が坂井秀弥さん、文化庁の記念物課の文化財調査官です。それから同じく本中眞さん、文化庁の記念物課の文化財調査官です。つまり、文化庁の記念物課の二人の人と石井進先生が監修する形で、日本歴史の原風景をさぐろうと「別冊歴史読本」が企画したのです。

ちなみにいいますと、予定は発行形態がB5判で一六〇頁、四色が六四頁、一色が九六頁、発行部数が一万二、〇〇〇部です。一万二、〇〇〇部といったらすごい数ですよ。私などが関係している本の中では、数多く出版しているほうです。予定金額が二、二〇〇円、発行予定が今年の三月になっています。まだ出ておりませんが、おそらく三月末までには出ると思います。

『日本歴史の原風景』という本には、具体的にどういう場所が取り上げられているかといいますと、長野県の近辺だけをあげてみますと、山梨県ではぶどう畑と勝沼館(かつぬまやかた)です。勝沼館というのは、中世の

武田氏一族である勝沼氏の館跡が国史跡になっていて、建物や土塁などが復元されています。もう一つ山梨県、静岡県で取り上げられているのが富士山です。隣の岐阜県では飛騨の高山ですね。それから岐阜県、三重県では輪中が入ってます。佐渡では金山、そして京都では平安京等々が出ています。

長野県では二地点が候補にありました。一つは姨捨の千枚田です。更埴市（現千曲市）にありますが、これはもう景観として大変に素晴らしいものです。もう一つが中山道でした。私のところに書いてくれといってきたのは中山道でした。私は出版社に掛け合いまして、自分の書きたいものにしてくれないかと交渉し、「修験道の世界　飯山市小菅」という題で原稿を入れました。出版社の側にいわせると、「途中で表題を変えてくれという交渉したのは先生だけ、しかも自分で売りこんできたのも先生だけだ」とのことでした。「いったいどういう理由ですか」と聞かれたので、「みんなが知っているところをいくら載せたって意味がないじゃないですか」と主張したのです。歴史の原風景を知りたいんだったら、あまり人に知られていないで、いいところがあるんだったらそれを紹介すべきだ、ということで強引に変えていただきました。はじめは原稿用紙五枚分を書いてくれということでしたが、たくさん書けるからと倍の一〇枚にしてもらいました。

私は小菅を売り出すために、井出澄夫収入役（現助役）の撮影したすばらしい写真を掲載しようとしました。一応、本人の了解を得て、現在ネガを借りております。そして今この会場においでになっている鷲尾恒久さんの写真と、私の撮った写真とを入れて向こうに送り付けました。その結果、数は

少ないですけれど鷲尾さんの写真、それから井出さんの写真、私の写真が、小菅の風景として載ることになりました。本当のことをいいますと、私は出版社に井出さんの写真を表紙に使用できないかと交渉したんですけど、「先生、それは売れんわ」という話になりました。考えてみますと、やっぱり売れ行きは表紙で決まっちゃいますから、有名な風景の方がいいわけで、これはちょっと無理だったのです。

私のいいたいことがわかりますか?。先ほどから述べているように、『日本歴史の原風景』と題される本の中で取り上げられている風景は、各県一つか二つです。北海道では三つありますけど、各県だいたい二つにすぎません。長野県の割り当ての一つは中山道、これは誰が聞いてもわかりますよね。普通に考えるなら、おそらく南木曾町の妻籠（つまご）あるいは山口村の馬籠（まごめ）あたりの写真が載って、私が説明するというのが編集者の意図だったと思います。それから原風景でいったら、姨捨（おばすて）の棚田もどうしても欠くことができないでしょう。

それを私は出版社に掛け合って変えてもらいました。私がこれほど主張し、相手もそれに乗ってくれるほど、小菅はすばらしいのです。この本の宣伝効果は相当大きいだろうと思います。今まで地元の人にずいぶん迷惑をかけてきましたが、これでもう小菅の皆さんにいろいろ言われなくても済むだろう、ついに全国的な注目を小菅に浴びさせる契機を提供できた、と勝手に考えています。

小菅の景観

なぜ今いったような形で私が主張しなければならないのか、小菅は本当に大事なのかということを、これから話をしてみたいと思います。

前置きがずいぶん長くなりましたけれども、「小菅」がどういう場所なのか紹介いたします。まず、皆さんのお手元に配布してあるレジュメの一頁目を出してみてください。これは小菅村づくり委員会が作成した観光案内図からとったイラスト地図です。実はこの絵も出版社に送ったんですけれど、さすがに頁数の問題もあって、掲載していただけませんでした。

小菅の集落

私はこの絵がとっても好きなんです。大変できの良い地図だと思います。それはどういうことかというと、地図を見ると中世から近世にいたるまでの集落に住んだ人々の世界観が、きれいに示されているからです。

この場合でいいますと、一番下の地点に追分（おいわけ）があって、その少し上には石仏が置かれています。飯山市には庚申塔（こうしんとう）が多いのですけれども、松本でいうならば道祖神、あるいは塞（さい）の神にあたるような役割を持って庚申塔が配置されています。つまり、よそから災厄が村の中に入ってくるのをさえぎるような形で、村の入り口に石仏が置かれているの

雪の日の仁王門

風切峠の石仏

です。

その上で、集落をもう一度守護するような位置に仁王門（におうもん）が置かれています。小菅のこの構造は村の入り口にあたる場所どこでも同じで、神戸の集落につながる風切峠（かざきりとうげ）にも悪いものが入ってこないようにと、石仏がいっぱい置かれています。この図ではきれいに出ていないんですけれども、里宮の下のところにお墓がありまして、よそとつながっていく道が通っているのですが、ここにも石仏が配置されています。

小菅に今残っている石仏は全部、江戸時代以降にできたものですが、江戸時代の人たち、あるいはそれから前の人たちの意識によれば、悪霊などは道を通って村に入り、病気や災難をもたらすのです。よそから悪いものが入って来るのを防ぐように、集落の入り口は神々に守護してもらっていたのです。

飯山の各集落の入り口に庚申塔が置かれたりするのも、まったく同じ発想法ですね。中世や近世の人たちにとって、村の入り口っていったいどんな風に意識された場所だったんだろうと考えるのに、

小菅の入り口は材料になります。神々に抱かれるようにして集落が広がっていたわけです。私はこれを大変すばらしい、歴史的な景観だと思います。

神々の里の設定

これからお話しすることは今まで誰にもいっていませんので、私の主張が正しいかどうかわからないのですが、私が実感したことを話させていただきます。

小菅の雲海

なぜ仁王門はあの位置でなければいけないのでしょうか、なぜ小菅はあの場所でなければいけないのでしょうか。前回たまたま小菅に泊まっていた時に雲海の世界を見ました。私が起きてみたら、目の前に雲海が広がっていました。当然、飯山の町も何も見えませんでした。町や集落は全部雲の下なんですよね。あれを見た時にうれしくて走り回っていたら、ちょうど雲海が切れた場所、雲海に隠れた場所が、仁王門のすぐ下だったんです。おそらく小菅にとって雲海が湧くことは、一年に何度もあることなんじゃないんですか？　よそではほとんど見ることができない雲海が、小菅では何度も何度も見ることができ、しかも集落から下を隠すのです。

これを見て私が理解したのは、感性ですから、正しいかどうかはわかりませんが、世俗のものは全部その雲海の下だということでした。つまり雲海の上に開かれるのは、雲の上という意味で、普通なら天上になりますので、神々の世界になるわけですね。神々の世界と人間の世界の接点があの雲海の切れ間だと理解すると、雲海の切れる場所を意図的にねらって仁王門は建てられているのではないかということでした。もしそうだとしたら、小菅がなぜあそこでなければいけなかったかの理由が、雲海という自然現象からも考えられる可能性が出てきます。

小菅から見る妙高山

妙高を拝す

小菅集落のメイン道路の中心線をズーっと目で追っていくと、どこにぶつかるかわかりますか？

ひときわ高く見える神聖な山、妙高なんですね。これもやはりものすごく見事な発想法ですね。小菅の一番上の大聖院跡の横、しだれ桜の近辺にある鳥居から下を見ますと、一気に下の方向に道が下がっていきます。それから目を転じて上のほうにやりますと、妙高のいただきがまっすぐ正面に見えるんです。

妙高は山の形が実にきれいですね、だからこそ信仰の対象にされ、

それ自体が宗教世界になりました。小菅の中央にある道路はその妙高を拝むのにぴったり一致するようつくられているのです。集落はおそらく宗教的なこうした世界を前提にして設計されていると考えられます。鷲尾さんから提供していただいた写真は、雲海の向こうに妙高が見える、実にすばらしい写真です。この風景は私たちが忘れている精神世界に大きな意味があります。こんなことは皆さんにとっては当たり前かもしれませんけれども、当たり前なことを認識した時の驚きは大きく、うれしいものです。

小菅は中世の人々が、あるいはもっと前の古代の人々が抱いた山に対する恐れ、そして雲海を媒介とする天上の意識、そういうものを意識しながら、意図的に配置されているというのが私の理解です。

奥社への道

何よりもすばらしいのは、集落の上に展開する景観です。集落最上部のしだれ桜から上の、小菅神社の奥社に至るまでの参道とその周辺の景観は、まさに地域のいや日本の宝です。これは明らかに神のいます地の景観だと感じさせます。

ですから、小菅においては単なる観光地にするのでなくて、皆さんがきちんと心の中に宝物と認識して、この景観を維持していくようにして欲しいと思います。ともかく、本当にすばらしい世界が現在も広がっているのです。

奥社への参道

小菅神社奥社

こうしたことを指摘した上で、注意していただきたいのは、私たちが物を本当に見ているか見ていないかです。先ほど博物館をつくるということは、学ぶための場を用意することだといいましたけれども、小菅へ行って周囲の景観や物を見て、学べるか学べないかは、見学し考察する人の力でしかありません。行く人が何を感じて考えるかでしかありません。

私が小菅で好きなのは、奥社への参道を登っていくと岩や木と語らざるを得ないことです。小菅に行って岩や木と語ることができるか、あるいは岩や木、一木一草に神が宿ると感じられることができるかできないか、今私たちが自然から試されているような気がしてなりません。

神の来臨と木・岩

ちょっとここらへんで寄り道し、わけのわからない話をします。あまり小菅ばかり触れていますと、皆さんのほうで退屈してくるかもしれませんので。

昔、信濃の諏訪社に現人神がおりました。その現人神は大祝と呼ばれました。私の場合、研究の対象には諏訪上社の方が多いのですが、上社では本来諏訪氏が大祝を務めていました。大祝が即位する時の儀礼が大変面白いのです。大祝は上社前宮にある楓の宮の前で即位するのですが、その仕方は神と人間を考える上で、興味深い例じゃないかと思います。

舞台は上社前宮の楓の宮です。この中で上社前宮へ行ったことのある人は、どれくらいおいでになりますか？　手をあげていただくと、けっこういますね。前宮は案外行っている人が少ないんですよ。信州大学の学生たちに聞くと、ほとんど行っておりません。そこで私は学生と諏訪大社に行く時には、前宮へ必ず連れて行くことにしています。前宮には神主さんが住んでいるわけではなくて、中心部分も車が通れるようになってしまって、どうも本来の雰囲気とは違うんですけれども、現在でも神さびた場所です。

楓の宮といっても、何のことはない小さな祠があるだけで、とても有名な場所には見えません。名称の元になったはずの楓があったところに、現在は小さな桜の木があります。その下に置かれた祠も木でできた小さいものです（最近、石の祠に変わり趣が一変してしまいました）。祠の前には現在、私

の前に置かれている演台ぐらいの平らな石、盤石石が置いてあるだけです（これもその上に加工された石が載り、雰囲気が一変しました）。これをイメージ化しますと、祠の後ろに楓の木があるわけです。その下に盤石石が配置されています。そして両者を結ぶ位置に祠があります。

大祝はどのようにして神になるかというと、この盤石石の上で儀礼をして神になったのです。どういうことかというと、神は目印となる楓の木に舞い降りて、石を通って人に入りました。木をアンテナにして神が降りてきて、岩にとりついて、岩から人にのりうつった。これが私の理解です。

神来臨のアンテナとしての木

もしこのように考えることができるんだとしたら、神は目印になるような木をめざしてやって来ます。このことは皆さんも本当はよく知っていることなんですよ。

柄山の熊野神社の大ケヤキは飯山で私がもっとも好きな木ですが、巨木がご神木にされ、その前に石の祠が建てられ、さらにその前面に二本の松が鳥居のように配置されています。明らかにこの巨木に神が舞い降りると想定されたものでしょう。

正月にはなぜ門松をたてねばならないんでしょう。門松をたてるという行為は、皆さんにとって当たり前のことですよね。それはあの緑色の松に神が宿る、正月の神が降臨すると考えたからなんです。

飯山に来ていいなあと思うのは、この雪の白い中に新緑が出てくるのを目にする時です。緑に変わ

る前に、一日一日ごとに木の先の色が変わってきて、何ともいえない美しさが展開されます。遠くから見ると、木々の芽が場所によっては色が波打ったような情景になっています。この時期の山と木々を私はものすごく美しいと感じます。この景観を見て私は、ああ春が近いのだなあとか、雪解けが近いなあとか、いろいろなことを感じます。

こうした風景を前提にしてものの考え方を変えてみますと、冬に木が枯れるということは木の生命が枯れてしまうことを意味します。木が枯れてしまうのは、木に籠もっている生命の気が枯れてしまったと理解されました。木々が持っていた、あるいは木々に入り込んでいた魂がいったん死んでしまった、生命力がなくなったから木は枯れてしまったわけです。木をよみがえらせるためには、魂を再び取り付けるか、このままでは死んでしまう魂にエネルギーを与えて、再び活性化してもらわねばなりません。木々だけでなく人間や穀物などにおいても魂の力が弱くなる冬には、それを増殖させようとする、御魂の冬（殖ゆ）のお祭りがいろいろ行われたりします。

雪の中の熊野神社大ケヤキ

しかしながら、緑の木々はたとえ冬であってもいつでもみずみずしく、力を蓄えているように見えたので、特別な力があると信じられたのです。すべてのものが枯れる時に、緑なす木に正月の神様はやって

くると考えたわけです。これと同様に正月の神様に来てもらう目印、アンテナとして門松が置かれることになったのです。

このように考えることができるのなら、なぜ五月の節句の際に軒先に緑の菖蒲の葉が飾られなければならないのか、あるいは今でも神社で必ず緑の葉色を持つ「榊」が飾られなければならないのか、それからお仏壇にも「樒」が供えられるのかも、理解できるでしょう。これらはすべて神仏が青々とした木々をアンテナとして、こちらの世界（人間の世界）に入ってくるだろうという発想法です。

山に行こう

小菅の山の上に登っていくと、すごいのは杉の大木ですよね。常緑の杉が天に向かって大きく伸びています。ああいう木々に神が降りてくる可能性があると、昔の人々は考えたのではないでしょうか。

日本でもっとも古い神社の形態を考えさせられる三輪山、大三輪神社などへ行ってみますと、必ず岩座・磐座と呼ばれる岩があります。神々が座す岩であり、ここに神が籠もると理解されたわけです。神々が岩に籠もるなどとは、ちょっと考えてみると不思議なことですよね。

私が最近出した『鳴動する中世――怪音と地鳴りの日本史――』（朝日選書）という本は、岩が鳴いたりすることに関係する内容です。岩が鳴き岩が動く、まあ考えてみるとおかしなことです。世界中どこでも石に生命があって、石が鳴いたり、石が動いたりするなどと考えるわけではないと思うので

すが、日本人は石に神様がやって来ることもあるし、石そのものが鳴いたり、動いたりするとの意識を抱き続けてきました。特別に大きな石、普通では人間が運べないような石、変わった形の石などには、神様がやって来るのではないか、神が来臨するのではないか、と古来日本人は考えていたのです。これに対応するように、神社の中では磐座と称するような岩があるのが普通です。

小菅の奥社までに行く間にある多くの岩は、まさしく神のよりくる岩として、我々が自然に感ずることができます。しかもその多くが、舟石（ふないし）のように中央部分に凹みがあったり、奇妙な形にちょっとかけていたりして、この石のくぼみなどに神様がやって来るのではないかと、思わず感じさせる不思議な力を持ったものです。

愛染岩と祠

私たちが忘れている神、仏に対する感覚を、中世の人たちは大きな常緑の木に、岩や石、特に厳かな山の景観の中に置かれたこういったものに見いだしていたのです。とするならば、今まさに失われようとする古来より日本人が受け継いできた神に関する意識が、小菅ではまだ残っているといえるのではないでしょうか。

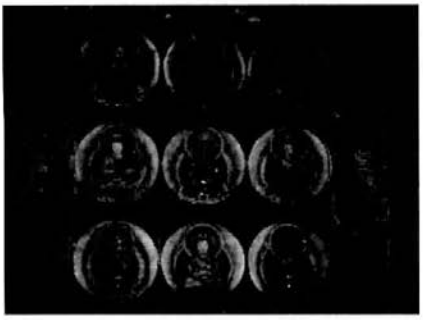
こうした心のふるさとともいえる景観が、現在まで観光地化されなかったために、小菅には実に見事に残っているのです。その意味で小菅は、日本人にとって心の原風景になりえる希有（けう）な場所なので

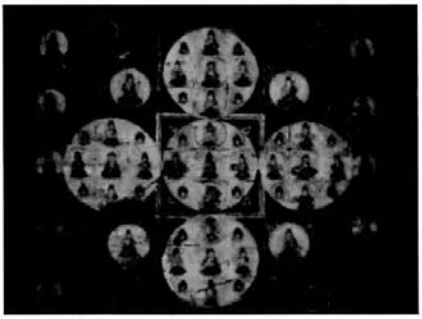
す。

村を中心にして人々が抱いた世界観がわかり、古代・中世の人々がどこに神を感じたかということがわかる。これが小菅から見えてくるものの一つです。

様々な文化財

小菅で重要なものに、現存する多数の文化財があります。たとえば、菩提院に残る曼荼羅は、従来も知られてはいましたが、今度やっと飯山市からも文化財指定されました。一部の人は認識していても、残念ながら市民全体にオープンになってなかったものです。





菩提院の曼荼羅

これは小菅山元隆寺の別当寺院であった大聖院から、もと桜坊の菩提院さんに流れてきたものです。この曼荼羅について、山梨県立美術館の館長の濱田隆先生、この方は前に奈良国立博

物館の館長をされていた日本美術史の研究者として大変重要な先生で、この人によって日本全体の評価が決まってしまうくらい優れた先生です。その先生にこの曼荼羅の写真を見ていただいたところ、「これは県レベルなら十分文化財にすべき品物です」とおっしゃられました。そこで私が一応委員推薦をしたという形で、長野県の文化財保護審議会の中では、将来の文化財指定の候補物件のリストの中に入れてもらってあります（その後、長野県宝に指定されました）。こんな重要なものが、重要性を認識されないまま、そこにポーンと置かれているのです。この他に文化財として、県宝に指定されているものに、竹鳳凰文透彫脇立などがいくつか残っています。

先ほどお話しいたしましたように、文化財というのはそれを通して学んではじめて価値があるのです。単に保存するだけだったら、金庫に入れてしまって誰にも見せなければいいわけで、文化財なんて名前もつける必要がありません。小菅神社奥社は国の重要文化財に指定されておりますが、これは国民全体が学ぶ価値があると評価されたからこそ指定されたわけです。同様に、県宝というのは県民全体が長野県の歴史その他を学んでいく教材になるということで指定しているのです。

竹鳳凰文透彫脇立

小菅あるいは飯山では多くの国や県、市の指定文化財を有しながら、今の段階ではまだほとんど学ばれていないのでは

ないでしょうか。視点を変えるならば、これから学んでいく材料を多く持っていることが、私たちが飯山市に博物館をつくっていかねばならない最大の理由なのです。

珠洲焼の発見

これまで学ばれなかった重要なものということでは、先ほど望月静雄さんがご報告してくれた「中世・珠洲焼の発見」、これ一つとっても大変なことなのです。今日の聞くべき一番重要なのは、望月さんの取り上げられた内容です。

皆さんは、これまで能登半島で作られ、この地にまで運ばれてきた珠洲焼の破片が、もし道ばたに落ちていたとしても、ほとんど注意を払いませんでした。望月さんの話を聞いて珠洲焼の破片に注意するようになったとしたら、――注意するようになったということは、もうすでに我々が学んだということです――それだけで十分な学習になります。

小菅で発見された珠洲焼のうち一つの破片は、これほど大きい瓶の口縁部にあたりますので、完形品としてあった時、瓶は相当大きかったはずですよね。おそらく高さも一メートルはあったことでしょう。そんな大きな瓶を中世の人々はどうやって運んできたんでしょう。これも我々にとって学びの対象になるはずです。可能性を考えるなら、船で千曲川を上がってきたことがまずは候補になるでしょう。それとも、中世の絵巻物に姿が見えるのですが、一つ一つ人間の背中で運ばれてきたので

しょうか。さらには牛馬などによって運ばれたのでしょうか。大きな陶磁器がいったいどこから運ばれてきて、どのような運送手段がとられたのだろうかと考えると、それだけでも面白いですよね。面白いと思ったらこれからどんどん研究していけばいいのです。

小菅における珠洲焼の発見は、私が学生と歩きながら陶磁器の破片を拾うようにといったことに始まりますが、その後に話をしてみると氏子総代の蒲原良典さんのところで、たまたま大変立派なものが拾われ、収蔵されていたことが判明しましたので、今日の望月さんのご報告も可能になりました。私が学生を連れて来ながら、こんなものがあるはずだから探してみようといったら、その段階ですぐに出てきたわけです。

よその地域で表面採集、要するに歩きながら拾うだけでは、中世のこんな遺物が簡単に見つかるわけがないのです。しかも珠洲焼は北陸とこの地域との関係を示す大変な研究材料です。こういうものがいっぱい出てくるのだとしたら、小菅がどのくらい栄えていたかの指標になるはずです。

小菅山元隆寺之図

私が小菅に来たばかりの時に、見せられたものの一つが、「信州高井郡小菅山元隆寺之図　永禄九年」でした。この古絵図は本当に永禄九年（一五六三）にできたものでしょうか？

永禄九年ですから、この通りならば武田信玄の時代に作られたことになります。武田信玄が小菅の

元隆寺の石垣

地を焼き払ったかどうかは別としまして、武田信玄、上杉謙信の時代の小菅の様子を伝える絵図がこれだっていうんですよ。

私の判断では図ができたのは江戸時代、それも相当後になるのではないかと考えます。なぜそんな評価をするのかといいますと、単純にいったならば「上之院」と書いてある、つまり大聖院の石垣の描き方が時代に合わないと判断したからです。絵図で見ると石垣は梅鉢積みのものすごい石垣で、これは現在残る見事な石垣と合致しています。けれどもこれは明らかに近世末期に用いられた技法ですよね。こんな石垣が書かれることは、中世にもこんな石垣があったことを前提としています。しかしながら、一般的に高石垣が広く用いられるのは織田信長による安土城築城後で、石垣の技法も穴太（あのう）積みと呼ばれる自然石を巧みに配置するもので、隙間なく石を配置した梅鉢積みとは異なります。少なくとも武田氏の城にさえ高い石垣は用いられていませんから、永禄九年にこの地方にこれだけの石垣があったとは考えがたいのです。

ですから、時代感も何もない、おそらく幕末に近い江戸時代に地元の人がいろいろな勉強をして、昔の元隆寺はこんなだったのではないかと、当時の集落の状況をもとにして想像復元したのがこの絵図ではないかと判断しました。逆に私はこれを見て、こういう絵図があるというのは、ちょっと小菅

についての一般的な評価も危ういのではないのか、と思ったわけです。

もう一ついいますと、絵図によれば大門（仁王門）のところから上まで道が一直線になっていますね。現況では大門から上に向かっていくと、大門を通ると石垣にぶつかって右に曲がり、それから山の方へ上がっていきます。絵図がもし正しいとしたら、大門は動いているはずです。地元の人に聞いてみると、移動されてはおらず元来あの場所だったというんですね。ということは、この絵図が間違って描かれていることになります。地元で絵図が作られているのに、これはいったいなぜなんだろうと納得がいきませんでした。

小菅が栄えていたのだとする証拠に用いられた絵図が実態を伝えていないとすれば、小菅の皆さんは俺たちのところは古い、小菅は戦国時代まで大変に栄えたと主張されるのですが、本当なんだろうかと疑問を抱いたのです。小菅の衆にいわせると、「武田信玄が川中島合戦の時に焼いたからいけないんだ」とのことですが、本当にそうなんでしょうか。

責任は信玄か

最初に飯山で講演を依頼された時、高橋桂先生から「飯山では上杉謙信ばっかりだから、笹本、ちょっと飯山の人たちにショックを与えるため、たまにはわけのわからん武田の話でも聞かせてくれんか」といわれました。それがきっかけで飯山において話をすることになり、それ以来のお付き合い

になったものですから、どうも飯山の人々には私が武田信玄とダブって見えるようなのです。私が何かとっても悪人で、小菅に火をつけた者の責任者みたいに思われているらしくて、信玄が火を付けたといいながら、山梨県生まれの私が批判されているように感じました。

確かに武田信玄や織田信長はあちらこちらの寺社に火を付けておりますが、火を付けられた寺社や村はたいていどこでも復興しています。たとえば信長に火をつけられた延暦寺でも、恵林寺でも、諏訪社でも復興しています。大きな寺社で、信玄や信長に火を付けられたからといって、復興しないほうがむしろ珍しいのです。してみると、地域衰退の原因を武田信玄の責任にしてしまうのは、住民の責任逃れの伝説ではないのか、皆様には怒られるかもしれませんが、私はそう考えました。

はじめのうちは、中世に小菅が絵図のように大変栄えたということそのものが、そんなにすごくはないのでは、と思っていたんですよ。

中世の繁栄が見えてきた

ところが、私にとってショックだったことに珠洲焼の破片がこれだけ発見されました。現在に伝わる文化財は移動することがありますよね。ですから、地域に突然、一つや二つなら現在文化財に指定されるようなものが、流入してくることはあり得るわけです。ところが、陶磁器の破片のようなものは、わざわざばらまいておく性質のものではありません。大きな瓶が、しかも遠く能登から運ばれて

来なければならないものが、これだけ出てくるとなると、私の判断は修正を迫られます。

つまり、今回の珠洲焼の破片発見によって、小菅は中世に大きな町であった可能性が強まったのです。しかも小菅に行っていろいろ教えていただきますと、現在の区長さん（市村文昌氏）のお宅には、地中から出てきたのだという鉄製の小さな仏像が所蔵されています。これを立正大学学長の坂詰秀一先生に写真を見ていただいたところ、中世の懸仏（かけぼとけ）の一部ではないかとのことでした。それから独鈷（とっこ）が同じく地中から出てきて地元に所蔵されています。明らかに中世に使われた宗教関連具が、地中から出て拾われているのです。

珠洲焼をはじめとするこうした遺物は、意図的に発掘されたのではなく拾われた、あるいは偶然に出てきたものですから、小菅に相当な文化があったことになります。私たちがまだ見過ごしているような文化財、まだ見過ごしている地中からの声、こういうものをしっかり見、聞くことによって、これまで気づかれずにいた過去における小菅の本当の姿が見えてくるのではないでしょうか。今までは注目すべきなのに見過ごされてきたものが、たくさんあるように私は思います。

したがいまして、珠洲焼や仏教具が出てくるということに気がつき、これを材料にして歴史を考えることが可能になりました。よくもまあ、蒲原さんのお宅では珠洲焼の破片などを集めておいてくれたものですよね。普通だったら、こんなみすぼらしい焼き物の破片を集めておいても、場所ふさぎになるし、邪魔じゃないかと思われ、捨てられます。ところが、こういうものを集めておいてくれた人

がいるおかげで、歴史認識がこれだけ進んだわけです。珠洲焼の破片から学べるということは、飯山を知ろうという我々にとって素敵な贈り物で、この地域がいかに日本海側と深く結びついていたかを改めて知らせてくれたのです。つまり、小菅を学ぶことによって飯山の特質が浮かび上がってくるのです。

柱松柴灯神事

もう一つ問題になってくるのは、これまで触れたものよりもっと重要なことかもしれませんが、民俗文化財の存在です。まず民俗文化財として当面問題になっているのは、柱松柴灯神事（はしらまつさいとうしんじ）です。

これに関しては、先ほど武田龍徳さんから、柱松神事のデジタル化保存の報告がなされました。先ほど見せていただいたビデオを見て思ったことは、テレビ編集者の解釈がちょっと独善的にしすぎじゃないかということでした。テレビのナレーションで解釈する前に、事実をそのまま伝えることのほうが重要ではないか、というのが私の率直な感想です。その上でよそとの比較などを通して、神事の意味を説き明かさねばなりません。

しかし、祭りそのものはできるだけ現状の形で、今後も伝えていかなければいけないはずです。そのためには、柱松神事がなぜ重要かということをみんなでもう一度認識した上で、伝えていくための努力をしなくてはなりません。

松柱

何度も述べてきましたように、小菅の景観や文化財は小菅だけの問題でなくて飯山を知るための材料であり、県民が県を知るためのまたとない素材です。県の無形民俗文化財に指定されている神事を、特定の人たちの負担だけに任せきってしまって、学ぶ時にだけ都合良く文化を享受して良いのか、こういう問題も出てくるのではないでしょうか。

柱松神事は他のお祭りと比較するならば、それほど華やかでもないし、見学する側も胸躍り血が騒ぐようなものではありません。本来の神事の形態としては、もっといろいろな要素が存在していて、その一部分だけが残っているのだと思います。しかし、長野県では県民が学ぶにたるすばらしい祭だと判断したから文化財に指定したのです。だとすると、この神事の中で何を伝えていったらいいのか、そしてあれだけ必要な費用をどうやって今後も負担していったらいいのか、そういうことを考えねばなりません。そのためには、祭りの意義を理解していくことが大切です。

外国人の目に映った小菅

昨年こちらに入りまして、まだわずかな間ですが私個人としては、地域の皆様の意識を高めるのに成功したと理解しております。

そのきっかけの一つは、私の大学にいる留学生の方たちに来てもらってシンポジウムを行ったことです。小菅が外国の人たちの目にどういうふうに映ったかを論じ、地域の特性を世界的な視野から確認しようとしたわけです。ドイツのフンボルト大学で助手をしていて、戦国時代の軍記物を研究している男性、それからエジプトのカイロ大学の助手をしていて、『今昔物語』の世界と『千夜一夜物語』の世界を比較しようとしている女性、それから中国の北京大学の講師までして、中国の古代史研究をしている男性、この三人の方に飯山市に来ているニュージーランドの女性に加わっていただいて、論じ合いました。

それぞれとっても興味深い話をしていただきましたが、中でもエジプトの女性、アマルさんという名前ですが、彼女の発想法は良かったですね。この会場に小菅の区長さんを勤めている市村さんがおいでですが、市村さんのところへ突然、学生たちとどやどやと押し掛けてしまいました。奥さんはだんなさんの横に座りながら、お茶やお茶菓子、漬け物などを当たり前のようにどんどん用意してくれました。しかも、だんなさんを全面的に立てていて、一歩引いた位置にいながら、何事もないようにおもてなしをしてくれたのです。この状況を見て、一同大変喜んだんですよ。

私が前々から区長さんにお願いしておいたのは、こんな素敵な家はないから外国の人たちにぜひ見せて欲しいということでした。区長さんのお宅は草葺き家として現在でも残っている数少ない貴重な建物で、しかもあまり後世の改築を受けていないために、たたきの土間から始まって、間取りや部屋そのものが非常にいい形で伝わっていますね。お宅そのものが地域の宝物になると思うほどです。そこへ外国の人たちに入っていただいたら、皆さん喜んで家を見たのですが、先ほどのように奥さんがあっという間に、次々といろいろお茶請けを出してくれたわけです。

この経験からエジプトの女性は、あれが大変うれしかったといわれたのです。エジプトにおける最高のもてなしというのは、お客が食べないことがわかっていても、あるだけのものを出すのだそうですが、区長さんのお宅では奥さんがそういうもてなしをしてくれた。大変うれしかったと発言してくれたわけです。すごいと思いませんか？　私は見る人が見ると心もわかるんだなあ、と感激しました。エジプトの大学の先生になる女性がそんなことをいってくれるって、これはすごいなあと思ったんです。世界に通用するおもてなし、これこそ文化なんですね。

また、彼女は自分の家からいつもピラミッドが見える。このために当たり前のもので、それほどすばらしいものだとは思わなかった。けれども世界中の人が見に来るのだから、きっと良いものだと思うようになり、誇りになった。小菅も住んでいる皆さんにとってこの地は当たり前かもしれないが、大変魅力的なところだと評価していただきました。

こういう形で、外国の人たちに小管を見てもらって、その経験をもとに発言をいただいたことで、私を含めて当日ご参加された皆様はずいぶん知的に刺激を受けました。

実は私もう一つ区長さんにお願いしてあります。それは私の子どもが大変な民家好きで、夢は草葺きの家に泊まってみることなので、最初にお会いした時からぜひ一度訪ねさせてくださいとお願いしたしだいです。子どもが草葺きの家に着目する時代になったのです。

飯山からみた川中島合戦に向けて

飯山を知的に活性化させるため、今年は何を意図しているかといいますと、「飯山からみた川中島合戦」のシンポジウム開催です。これは飯山市企画財政課の武田誠係長を中心に、今一生懸命案を練っている最中です。飯山は上杉の信濃における最後の拠点でありながら、飯山の意義を抜きにして「川中島合戦」の戦いだけが取り上げられます。

川中島合戦で武田と上杉が信濃を舞台に戦ったとしたら、当時の信州はいったいどうなっていたんでしょうか。つまり信州は決戦のためにスタジアムを貸しただけなのでしょうか。信州がスタジアムを貸しただけだったら、何も現在に至るまであんなに騒ぐ必要はないわけですよね。川中島合戦に関係する伝説が各地に残っていることでもわかるように、この合戦は長野県に大きな影響を与えています。私たちの地域、つまり飯山にとっては川中島合戦がいったいどのような意味を持ったのでしょう

か。

これまで川中島合戦として評価されてきたのは、川中島のある長野市に住む人々の視点からであって、それ以外の地域に住んだ我々にとって、どういう歴史的意義を持つのか、この問題をまったく検討してこなかったわけです。

しかも昨日、飯山市議会の議員さんにも教えていただいたのですが、飯山には上杉謙信の伝説がいっぱい存在しています。たとえば小菅神社奥社参道には川中島合戦の折、謙信が隠れたという隠石があります。その分布からしても謙信は飯山にとって英雄です。それに対して武田信玄は悪者にされていますので、武田を研究している私の肩身は狭いんです。それならば、地元にとって、つまり飯山にとって上杉と武田が戦ったことの意味はどこにあるのでしょうか。市民の皆さんがこうした視点に少しでも興味を示してくれたならば、飯山の見直しにもなるのではないかと考えています。

川中島合戦の折、上杉謙信が隠れたという隠石

昨年は小菅に関係したシンポジウムを開催しました。小菅は一つのテストケースで、小菅を事例としてあげることによって、他のところもこんな勉強の仕方もあると方向を指し示したいと思い

ます。小菅だけをやる必要はありませんから、今年はもっと視点を大きくして飯山市の側からの歴史の見直し、そのきっかけの一つとして飯山からみた川中島合戦のシンポジウムを企画した次第です（このシンポジウムは実施され、その模様が『川中島合戦再考』として、新人物往来社から刊行されました）。

そしてできるならば、来年は小菅の柱松神事を取り上げたシンポジウムができないかなあと考えています。

柱松神事のシンポジウムを

たまたま来年は、三年に一度の長野県無形民俗文化財に指定された柱松神事の年に当たります。何で小菅の柱松神事が県の文化財なのか、神事のどこが面白いのか、なぜ市民はあんなに見に行かないのか、考えてみると柱松神事を通しても重要なことがいくらでも出てくるんですよ。

県の文化財、県の文化財というけれども、市民のほとんどの人が知らないようだったら、文化財指定の意味がありません。なぜ県は文化財として指定したのか、この祭りは県の中で、あるいは全国的にどのような意味があるのか、これをみんなに認識してもらうためには、やっぱりみんなで話し合ってみる必要があるんじゃないですかね。ですから皆さんの力で何とかシンポジウムがやれるように、市長をはじめとする市の当局を突き上げていただきたいものです。来年は柱松の神事を行う前の日に

シンポジウムを開き、しっかり学んで盛り上げておいて、翌日は現地に行ってお祭りを見て帰ってくる、こんな企画が面白いのではないでしょうか（このシンポジウムも実施され、その模様が『奥信濃飯山発　火祭り――火祭り文化考――』として、ほおずき書籍から刊行されています）。

このように今の私の意図ですと、一年は小菅をテーマにして学び、その翌年は飯山をテーマにして学ぶ、その繰り返しを何度かします。こうして地域研究を深め、蓄積していけば、きっと私たちの世界の特殊性、あるいは私たちの世界が持っている文化特性が見えてくると思うんですね。それを糧にして地域づくり、市の将来計画も豊かなものになってくるはずです。ですから、これからのシンポジウムは新たな文化活動なのです。

昨年のシンポジウムの刺激などもありまして、今は小菅の皆様もずいぶん学ぶ姿勢を見せてくれています。今日も小菅の皆さんがいっぱい来ていますけど、知的探求という動きが大きく出てきております。これまでだったならば地域の皆さんは、小菅神社に伝わった文化財も人には見せない、つまり保存することに中心を置いて活動をしてきました。

ところがここにきて、文化財も学ぶためには少しは公開しましょう、むしろどうやって将来に伝えていくかを考えていくためには、人にも見てもらわなくてはいけない、と発想していただけるようになりました。博物館ができ、飯山市民に学んでもらうためだったら、私たちも先祖から伝えてきた大切な財産でも、少しは提供しましょう、という雰囲気まで、醸成されています。

小菅にこれだけの気持ちがあるのなら、私たちは徹底的に学ばせていただいて、小菅に対してお返しをしなければいけません。今まで柱松神事も、小菅神社の文化財も小菅の人たちに守っていただいて市民が学ばせていただいた、いわば市民は都合のいい時に利用だけし、全部おんぶに抱っこだったのですけれども、本当にいいものだったら我々市民としても、その保持のためにお手伝いできることはしていかなくてはなりません。

小菅の住民には、小菅神社の文化財はあくまでも我々のもので、お手伝いしていただかないことが我々のものである証になるという考え方もあるでしょう。しかし、本当に重要な文化ならば、小菅の人たちだけが無理するのではなく、せっかく同じ市に住んでいるのですから、お手伝いできることはしますよという市民運動だって出てくるのではないでしょうか。そういった際に、三年に一度しか行われない柱松神事は、小菅の住民と祭りに関わらない飯山市民とを結びつける絶好の機会だと思います。

食べ物も文化

私はこれまで触れてきたものがすべてだとは思いません。海草の「えご」料理なんかいいですよね。飯山では祭礼の都度「えご」を食べていますが、「えご」を食べる文化は信州の中でも限られた場所だけです。それはいったいどうしてなんでしょうか。これを考えたり、その意味を探ることも重要です。

正月に飯山の市民は何を食べているんでしょうか。飯山のお雑煮はどこの地域でも一緒なんでしょうか、違うんでしょうか、飯山のお雑煮に入れる野菜や餅の形などは長野や松本と違うんだろうか、違わないんだろうか、食文化という側面から、飯山はよそとどこが違うんだろうかとしっかり考えていくことは、私たちを自覚することになってくると思います。

同様なことは食べ物でなくとも、いくつもあります。挨拶の言葉や声のかけ方、お辞儀の仕方も研究の対象にできるでしょう。自分たちが美しいと思うものが、どこにあるのかを気づくだけでも違ってくると思います。

そういうことを考えていくためには、まず私は歴史だけでなくて自然でも、言葉でも、美しいと思うもの、何でも材料にして学ばねばなりません。この学びを通して、地域の未来をつくる子どもたちに文化的感動を与えることができるように、準備を進めていかなければいけません。なべくら高原の森太郎を見て、自然の力に感動し、人として大樹に育とうという決意をもってもらえるような子どもたちになって欲しいものです。子どもたちを豊かに学ばせなければ、地域の未来も来ません。

なべくら高原の森太郎

学ぶとは何か

地域文化を理解し、先ほどいった問題をどのようにして解いていくか、いかにして文化を学んでいくのか、ということが飯山の未来に大事な鍵を与えてくれます。

博物館友の会の会員が何のために集まったのかというと、基本的には博物館で学びたいという気持ちからではないでしょうか。それなら学ぶとはどういうことでしょうか。歴史学を学ぶ私の場合、私たちはどこからきてどこに行くのか、私は今どのような歴史の局面にたっているのかを知り、未来を構築したいという衝動です。私のような人間が出てくるのは、過去の人間の営みがどういうふうであったからなのかを知りたいのです。

皆さんが行動をする時には、それぞれ自分の経験をもとにして判断し、次の動きを行います。大きくいうならば、これと同じように過去を振り返ることによって未来の指針を作っていく。これが学ぶことだと私は思います。

学ぶということは過去を振り返るだけではどうしようもなくて、私たちがいかに行動していくかという指針を持てるか持てないか、その選択肢を得ることが大事でしょう。今までの博物館の場合は、特に過去のことばかり言いすぎてきました。未来はどうあるべきか、先ほどいいましたけれども、飯山城は過去がどうであったかを知った上で、じゃあ未来はどうするのか、飯山城の百年後をどのようにするのかということを考えていかなければ話にはなりません。一人一人が、私たちの生活はどのよ

うにしていったらより豊かなものになるか、当然、その豊かさは単なる物質的な豊かさのみではありませんが、これを考えていく場として博物館が必要なのです。

四、文化の創造

豊かさの認識

昨日、望月さんたちといろいろ話をしていて思ったのは、どこへいってもこれが足りないと、足りないものの詮索ばかりしすぎではないかということです。自分たちが持っている素敵なものに関しては、当たり前のことだとして誰も何もいいません。ですから飯山の人たちと語り合いますと、都会へ行けば夜も明るいし、いつまででも飲めるし、雪も降らないし、美術館も博物館も何でもあっていいなあ、それに対してこっちには何もないということばかりが話題に上ります。

でもよくよく考えてください。たとえば、カタクリの花の咲く時期のカタクリを自然の中で満喫できる世界は、日本の中にどれだけあるでしょうか。あれだけ美しいカタクリが咲いて、場合によったらカタクリをとってきて、おひたしにして食べられる世界、これは豊かじゃないんでしょうか。都会で飯山のようなうまい空気が吸えますか。こ

カタクリの花

の心地よい風のそよぎがよそで実感できますか。この景色はいくら金を出したら買えるのでしょうか。

人間にとって一番大事な問題として食料問題があります。今、日本は満ち足りているような気がしますけれども、食料の圧倒的多くは輸入品になっていますよね。もし海外との関係が駄目になったら、日本人は食っていくことができません。その時でも農地をこれだけ持つ飯山の人たちは、十分に食料を得ることができるでしょう。米だけでなくてカタクリの根っこでも澱粉がとれますし、山の中に生えているクズの根でも食っていけます。こうした自然の中の食物は、私たちが生き延びる最大の武器になります。

うまい空気とすばらしい景観と美しい自然に接触でき、何よりもいいのはみんなでスクラムを組んで動いていこうとする人のつながりがあることです。これはよそでは絶対にまねのできない文化です。にもかかわらず、これを飯山に住んでいる人は誰も評価しないんですよ。みんな都会人と同じ指標で、何が足りないと主張するのですが、都会人の評価の対象だけでは地域に住む意義が理解できません。

皆さんにとってこれは足りないけれども、我々はこれを持っている、だから我々はいいんだという気持ちを、きちんと認識しなければいけない時期になっているのです。

文化を担う誇り

小菅の人たちにとって柱松神事を伝えていくのは大変なことです。間違いなく経済的にも、時間的

にも、その他何にしても負担が大きいことと思います。

私の教え子の一人は下伊那郡の上村(かみむら)で霜月祭りを中心になってやっています。上村は飯山から見たら、それこそ山間の村です。でも彼は一年に一回の霜月祭りの時には、日本中から注目される演者の一人になれるんです。彼にとって、国指定の重要無形文化財を支えているのは俺なんだ、上村は過疎で日常的に人がいなくても、祭りの時は日本の文化の中心になるんだ、だから生き生きとやっていける、このように考えているようです。

つまり、自分たちこそが文化の担い手であって、県や国の文化の体現者だという誇りが人を支えるのです。たとえば、飯山市内の町の人たちが柱松神事を中心になって担うといっても、文化と伝統でよそ者の参加は断られるでしょう。神事に参加できるということは、負担もしなければならないけれども、その代わり他の人にはまったく持てない誇りが得られ、関係者以外触れたくとも触れることのできないものに接することができますので、負担以上のものを得ていると認識を変えていく必要もあるのです。

最初に雪の話をしましたけれども、雪はマイナスだけではないのです。雪の中から生まれる文化もあるのです。同じものでも、見方を変えてしまうとまったく違う側面も見えてきます。文化には常に様々な面が存在しています。その多様性を我々が認識して、地域が持っているものの豊かさや、強みを理解する。それを通じて主体的に多様なものを伝えていけば、文化の伝統を伝えることになり、さ

らに新たな文化創造ができるはずです。

新たな文化創造

文化維持に際して負担意識だけ、あるいは義務としての守りの意識だけでは困るんですよ。だって柱松神事だって、以前つくられたものであって、最初に導入されたものが時間経過の中でいろいろな形で改変されて、現代に至っているわけです。伝えるという側面と同時に、文化は常に新たに付け加えられ、豊かになっていく側面もあるのです。

今の状況で柱松神事を伝えようとする時には、文化財に指定されているのだから、これは新たな改変には一応ストップをかけて、このままの形で変えないようにしましょう。デジタル化して映像をしっかりやって、できるだけ百年たっても今の形を変えないようにしましょう。これが一つの動きですね。当然これはしてもらわなきゃいけないことです。

でも、それだけで皆さんは我慢できますか？　将来も子どもたちに負担をさせるとしたならば、ああやれこうやれって伝統にがんじがらめにするだけで良いのでしょうか。もっと違うお祭りをもう一つつくる、あるいは私たちのための文化として新しい創造だってしていかなければいけないと思います。お金が足りないのならば、都会人に参加してもらって参加料を取る新たな祭りを創造し、新たな文化創造を行ったって良いはずです。

どちらかというと、小菅ではこれまでの歴史の中に押しつぶされることに慣れてきましたが、我々が打って出て、たとえば二十一世紀の柱松神事は三年に一度従来通りにする、しかしながらこれを行わない二年に一度ぐらいは、現代の柱松神事をつくって、新たな祭りをしたっていいわけですよ。現代の柱松神事は何も小菅だけでやる必要はないわけで、市民で創造していってもよいのです。あるいは日本全国に呼びかけて、参加者を募って大がかりなものにすることも考えられます。

過去の遺産の上に、新しい文化をどうやって創っていくのか。いくらでも方法はあると思います。たとえば雪祭りの世界の中で柱松神事を執行することもありえるでしょう。私がいいたいのは、今までような形で保護する、保存するということの重みに耐え兼ねるだけでなくて、保存できることの幸せをもう一回認識して前に行きたい、そのためには新たなやり方を模索したっていいだろうということです。

地域の皆さんにはそれを学んでいただきたい。それこそが次にやっていくべき方向ではないでしょうか。

村おこしと観光

私は「村おこし」という言葉に対して抵抗を持っていました。ところが、今飯山でやっているのは明らかによその村おこしだと思うんですね。どうも村おこしというのは地域によって形も意識も異な

るようです。

竹下内閣の頃の「村おこし」は、一村一品運動のような運動、あるいは観光客をいかに誘致するかに中心が置かれてきたような気がいたします。現在はどこへ行ってもものすごい不況です。かつて経験しなかったくらいの不況により観光客も激減しています。観光客が激減している中で、食っていくためだというので、みんなが宿泊料などの値段を下げたりして、観光客を取り合おうとしています。結局限られたパイをいかにしてとるかで、多額の資金をかけて、パイの取り合いをしているだけです。このために、どこの観光地でもお金をかけた割に何のプラスにもなっていません。投下資本が地域にかえってくるとは限らないのが実状です。

私は今、南木曾町の博物館の協議委員を務めていますので妻籠に行くのですけれども、皆さんは妻籠が何であんなに世界的、日本的に有名になったか知っていますか？　失礼な言い方になりますが、妻籠は住民が貧しくて家を改築する金ができないままに取り残され、過去の景観がパックされてしまったのです。過疎化がどんどん進んでしまって、普通の集落だったらここを変えよう、あそこを改築しようといって、どんどん直していったのに、妻籠ではあまり経済的余裕がなかったので、改築することができなくて建物が古いままで残っていたのです。そこに目をつけて、町並みそのものがすばらしいんだって評価をして売りにかかったら、そのまま全国的に有名になった。貧乏だったことが逆に最大の武器になっていたわけです。

観光というのは、私たちが何を売るかによって、情報発信の仕方、売り出しの方法が異なります。自分たちが自らふるさとを発見して売りこまずに、どこにでもあるようなものに目を向けて、猿まね的な売りこみをしても、観光化は失敗することでしょう。実際そうした事例が各地に見られます。

魅力は人かも知れない

本当に観光はいいんでしょうかね。こんなことをいうと怒られるかも知れませんが、いわゆる「村おこし」の観光に私は納得がいかないのです。

最初に述べましたように、私は下伊那と飯山が好きなんですよ。下伊那や飯山に対して都会的な場所の人の方が心がぎすぎす荒れていて、話していて面白くない、経済の論理ばかりで動くように感じるのです。でも人間は経済の論理で動いているわけではないので、温かい人の付き合いや、自然の豊かさに惹かれます。だから飯山がいいのです。ということは、もしこれから一般的な観光開発をどんどんしていった場合には、人の心が荒れますけれども、それでもいいんですか、という問題が出てくるんですね。

たとえば、小菅の山へ登って観光客がゴミを捨てていく、この行為はすごく腹立たしいですね。宗教的世界の場に平気でゴミを捨てて、なんとも思わないような人間には、観光客といえども来てもらうべきではない。宗教的な場において心の洗濯ができないような奴だからこそ、ゴミを捨てていくの

です。それにもかかわらず、まあまあ観光客はお金を落としていくからいいよって容認して、小菅の住民にも自然に対する恐れなどに裏打ちされた宗教的な気持ちがなくなってしまうようでは、あまりにも喪失するものが大きすぎます。

未来の社会において、心持ちをどういうふうにして維持し、育てていくかという部分に主体を置くならば、従来のような観光に立脚する地域開発は、はっきり言ってすべきではないところまで来ています。

小菅に何百億円投入しても今以上に小菅が良くなる、つまり人間の心が美しくなったり、小菅の景観を良くしたりすることはできませんし、投下しただけの金額に見合う利益をもたらす観光客は、現状ではまず来ることがありません。

金をかけて元を取り、利益をあげるというのが一般的な村おこしのようですが、見ていると飯山の村おこしは違うんですね。飯山の村おこしは住んでいる自分たちが主人公になって、コミュニティセンターで地域のことをしっかり知り、自分たちが住んでいるところがどういう場所か認識して、自分たちが勉強の対象物を見付けて勉強していこうという運動のようです。

この場合、小菅地区は大変多くの学びうる素材を持っていると思います。

観光客はもういらない

私としては、従来のようにお客さんに何でもいいから来てくださいというような状況ではもうなくて、小菅の方であなたなら来てもらってもいいですよ、と地域住民が高い位置に立つような観光を考えるべきだと思います。変ないい方ですけれども、私たちは奥座敷を開放してもいいんですよ、普通の人には奥座敷を開放するということはしないんですけれども、あなたは特別な人だからここに入れてやるのです。小菅に来るからには、相当な気持ちを持ってきているんでしょうね、と威張るぐらいのつもりになっていかなければいけないのです。

小菅の北竜湖

これは数多くの観光客を誘致することによって、地域住民が経済的に豊かになるというよりも、文化的・人間的に豊かになろうとする、新たな観光客を受け入れる方向です。

最初にいいましたように、今まで私たちの多くはお金がもうかれば、つまり経済が良くなれば、豊かになるとだけ考えてきました。その結果、到達した現代社会は本当に良い社会といえるでしょうか。子どもたちの状況を見ていても、心が荒れ、人に対する思いやりのない、とても貧しい社会になっているように思えます。経済以外の豊かさをそろそろ追求していく必要があります。

そういうような時、小菅は学ぶ人たちが来てくれて、その成果を住民に教えてくれるんだったら、この地域に入ることを許可しましょう。私たちが学ばせてもらえるならば、あなた方も入れますけれども、そうでない人たち、たとえばゴミをいっぱい残しておいて、私たちがゴミ掃除をして、わずかな金を落とすのに期待するくらいなら、観光客は入らなくてもけっこうですよ、私たちの世界はそんな安っぽいものじゃないですよ、と主張するぐらいのことをしてもいいのではないでしょうか。

私が『日本歴史の原風景』という本の中に小菅を入れたのは、これを意図しているわけです。学びにやって来る、つまり歴史の原風景を探し求めて来る人たちに、地域をオープンにすればいいんであって、単純な観光客だったなら、こちらから頭を下げて来てもらう必要はありません。そうした宣伝に、この本を使おうとしたわけです。

地域に生きる主人

問題はその次です。小菅に生きる人々が主人公になった上で、小菅に住む一人一人が観光客にとっての主人として知的にも迎えるだけの能力を持たなければなりません。飯山人の良さは簡単に人を受け入れるところにあると思います。人を受け入れるというのは、たとえば小菅の人たちが観光客に対して、私が小菅を背負ってたっている、小菅の主人ですと、みんなが主張できるようになって本物になります。小菅のことはよく知ってますよ、ということをいえるぐらいにならなければいけません。

そのためには、住民がまず地域をよく知る必要があります。自分が地域のことを知らないで、他人に説明することはできないのです。小菅に住んでいる人が、小菅のいいところ悪いところを全部知らないでいて、他人に説明することはできません。私たちは今やっと小菅の勉強を始めたばかりです。小菅に住んでいる人たちは、当然小菅のことをよく知っていると主張していかなくてはなりません。そういう雰囲気をつくっていく必要があるのです。いざという時、よそから来た人たちにしっかりと地域の案内ができる知識を身につけましょう。

小菅の里を文化的に売り出そうとするならば、地域の人たちには自分たちこそが亭主であり、大学でいえば教授の役割を負っているのだという自覚を持ってもらわねば、どうしようもないのです。もしそうなったら、後に続く人たちも誇りを持って小菅の文化を担うはずです。

地域教育と子どもたち

文化を創るには、今の世の中だけを意識していたのでは駄目なんですね。子どもをどうするんですか？　現在一番問題になってくるのは、子どもたちのことじゃないですか。

これから土日が休みになって、ゆとりの教育が始まりますよね。ゆとりの教育が始まった時に、おそらくしなければいけないのは地域教育でしょう。たとえば小菅の子どもたちに、小菅の歴史をじっくり知る方法を用意してやらなくては、先ほどのように文化的にも亭主になれといったところで、ど

うしようもないわけです。地域に対する誇りを植え付けなければ、地域に対する愛情は生まれません。

飯山市内でゆとりの教育で総合学習しようとする時、どれだけ学びの対象があります？　最初にあげた雪、飯山城、小菅、これはすべて学びの対象なんですよ。でもそれをきちんと教えるだけのプログラムを作れる人が、今の飯山に用意されているでしょうか。飯山の子どもたちが飯山に関心と誇りを持てるよう、しっかり教育する場は用意できているのでしょうか。

博物館が必要なのはプログラムをつくって、いざとなったら教育の先端にたってくれる人を用意するためです。その役割を担う人こそ地域博物館の学芸員じゃないかと思います。

たとえばいい話を聞く機会があったとしたらば、皆さんだけが聞いて終えるのではなくて、子どもにも聞かすような運動をすべきです。最先端の学問を子どもたちに教え込む必要もあります。また、子どもたちに本当に小菅の良さを実感してもらうツアーなども面白いかもしれません。そのためには皆さんが必要だと思うことを実現できる体制を整えねばなりません。こういう運動を次々にこれから展開していかなかったらば、皆さんも市民として主人公にはなれませんよね。

現代に生きる人たちだけが主人公でなくて、むしろ次の世代、その次の世代の人たちも、今よりもっと故郷に愛着が持てるような教育を繰り返していかねばなりません。こうしたことは、小菅だけの話じゃないですよ。飯山全体の中で、飯山に対して私たちはこれだけの事業をしてきた、将来の子どもたちにはこうなって欲しい、と皆さんがしっかり主張しなくてはいけません。つまり、過去を振

り返りながら未来を創っていく、そういう連環の中で私たちは活動をしていく必要があるのです。

今まで述べてきたことは、ある意味では夢のようなことです。けれども、夢を抱かないで人間は生きておられません。そしていい夢を見れば、それを必ず何らかの形で実現しようと、努力するはずです。小菅の人たちが今まであれだけ文化を担ってきてくれたことに対して、市民全体で感謝すると同時に、もうこれからは小菅の衆だけに任せておくのでなくて、我々もやれることはやったほうがいいんじゃないか、そういう運動を次には起こしていかなければいけないと考えます。これも一つの夢です。

菜の花咲かせる会

飯山に来て素敵だなと思ったことの一つに、「菜の花咲かせる会」があります。菜の花を咲かせることは農業青年が中心になって始めましたが、現在でも営利目当てでなく菜の花を咲かせ、実に一〇万人もの人たちを集めるわけでしょう。菜の花を支えている人たちの力ってすごいですよね。

菜の花を支えている人々は、おそらく菜の花を見に多くの人が来てくれた、菜の花で喜んでもらえる、人の笑顔を自分のものにする、その心の支えだけでやっているんじゃないかと推察します。

ところが過日話をしていたら、もう菜の花で人を集めることも曲がり角になってきていて、観光客がゴミは捨てていくし、交通渋滞はあるし、どうしましょうかと問われました。私はここらへんで思

菜の花と千曲川

いきって駐車場料金をとるべきで、菜の花を咲かせるために努力してきている人たちが、少しは金銭的にも報われるような形にすべきだといいました。

ゴミを捨てるような、あるいは排気ガスだけを残していくようなお客に来てもらうぐらいだったならば、そういう人には来てもらわなくてけっこう、楽しむのは私たちが十分楽しめばそれでもう満足です。今までは他の人にも楽しませてあげようという気持ちでやってきたけれども、こんなにマナーの悪い状況だったら誰にも菜の花を見せてあげませんよ、というぐらいのつもりを持って、心のある人だけ集めればいいんじゃないか、と私はそういうふうに思うんですね。

あの菜の花の状況を見ていくと、飯山には地域で他人のために尽くしてもいいよという人がたくさんいて、新しい文化を創りあげつつあるといえます。それと同じように、小菅の美しい自然、小菅の今まで持ってきた文化に対して市民がスクラムを組めば、新たな文化創造もやっていけるはずです。

学ぶことと教育料

よくよく考えてみますと、柱松神事を維持するために、労力、お金その他で地域住民が払ってきた

負担が大きいことは明らかです。おそらくこのままでいったならば、少ない人数ではとうてい維持できません。

神事や文化が維持できなくなってから、その重大さに気づかされるのでは、市民全体にとって大変な損失です。どこでもそうですけど、文化や祭りがなくなってから、はじめてそのありがたみがわかってきます。しかし、なくなってからでは遅いのです。私たちはもう一回、柱松神事その他を勉強しなおして、みんなが本当にいいものだと思ったら、これを支えていく方向を取らなければいけません。同じように私たちはこれからまだまだ小菅から学ばしていただかなければならないことが、いっぱいあるのです。

普通、塾に行けばお金を払うのが当たり前ですよね。大学でも授業料を取っています。学ばせてもらうためには、教えてくれる学校の先生たちに、学ぶ側が給料などを払っているわけです。これから飯山の文化の中心的役割をもし小菅が持つとしたら、博物館はあそこに行けばこういうものが見れますよという交通整理をして、人々を誘導しなくてはなりません。実際には小菅に行って学ばせてもらうとすると、小菅の人たちは全員が博物館の学芸員です。ボランティアの博物館の学芸員であったとしても、そこに我々が何らかのお礼ができるような体制を、やっぱり整えていかなければいけないと思います。

おわりに

最初に述べましたように、今回の講演に関しましては、何の用意もせずに急きょここで適当に考えながらしゃべったものですから、話があちらに飛び、こちらに飛んで、ややまとまりがなかったかと思います。

しかし、皆さんは「博物館友の会」を組織し、これから私たち飯山市民の博物館をつくる、そして飯山市民の未来を考える核として博物館を育てようという運動を、今まさに始めてしまったわけです。始めた以上は、徹底的に突き進まなければいけません。

小菅の人たちには、そういう動きと連動して自分たちの場所を学んでもらったらいいんです。地域の中にいると気がつかないことがいっぱいあります。小菅の皆さんにとってはあまりに当たり前だと思って気がつかないことが、同じ市内の違うところから見たらたくさん見えます。私のように松本からやってきたら、皆さんと違ってこういうことも見えますよ、だからもっと多くの人に見せ、教えてやったらいかがですか、と主張できます。こういう交流を通じて、要するに小菅の分析をし、小菅を相対化してみれば、皆さんの地域もこういう特質があったのか、と明らかになってくるはずです。それこそ文化活動であり、飯山の再発見です。

これから私たちがつくろうとする博物館について、中心となってこの活動をやっていただいている望月さんは、「博物館という建物をつくることよりも何年かかけて地域のことを学ぶことのほうに、実

は大きな意味があるんですよ」とおっしゃられています。こういう人がいる限り、私たちの船頭はもう存在しているといえます。ですから、徹底的に地域から学ばせてもらって、飯山の市民運動は県内でもっとも地域文化を学ぶ、本当に生涯学習をしている、といわれるぐらいにしていきたいと思います。

ともかくそのためには、お互いしっかり汗を流し、未来を信じて頑張りましょう。

一応ここで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。